

巨樹・巨木シリーズ36 愛媛県シリーズ-1

細田木材工業株式会社

顧問 細田 安 治

「巨樹・巨木シリーズ」は36まで来た。先月号で「次は三重県に入る」と書いたが、ちょっとした行き違いがあり、次の機会として、四国に入る。手始めは愛媛県である。

資料提供してくれている巨樹探訪者U氏のエネルギーには「驚きと感心」を通り越している。というのも、東京を夜中の午前零時にスタートし、11時間かけて広島県の福山市から四国へ渡る「しまなみ海道（西瀬戸自動車道）」まで一気に突っ走り、四国に入っているからだ。

愛媛県松山市はU氏出身大学の愛媛大学があることもあって、第二の故郷ともいうべき愛媛まで、11時間突っ走ったのではないかと驚くべきエネルギーである。U氏の冒険心と意志の強さ、実行力に改めて敬意を表し、今後の道中安全を祈念している。

では愛媛県に入ろう。

*愛媛県ホームページを参照して

愛媛県とは、四国の北西部に位置し、気候は温暖、かんきつ類の栽培が盛んな地である。面積は5,676 km² (全国26位)、人口は133.5万人 (全国28位)。391に及ぶ島々、西日本で最も高い山をもつ、海山どちらも豊かな自然に囲まれている。道後温泉をはじめ、松山城、県内に多数ある正岡子規の句碑など、観光地としての人気も高い。

<筆者のつぶやき>

四国とは、今でこそ瀬戸内海に3本の橋が架けられ一跨ぎで本州と結ばれているが、江戸時代には、伊予、讃岐、阿波、土佐としてそれぞれの国に大名が領主として君臨し政を束ねてきた。それだけに独立精神が強いところである。このような地理的条件から四国は本土との交流不足が幾分見られた。

1990年代、年号が平成に変わる頃から、兵庫県からの明石大橋が架けられたのが始まりで、その後続けざまに橋が架けられた。今では3本の橋が架かり、経済圏が本州と一体化し大きく発展した。

ここで、本州と四国を結ぶ3つの橋のルートをご紹介します。



本州と愛媛県をつなぐルート

橋名	完成	区間	構造	中継地点
瀬戸大橋	昭63年 (1988)	倉敷～坂出	世界一長い鉄道併 用橋	離島10本橋
明石海峡大橋	平10年 (1998)	神戸～鳴門	車道下鉄道	淡路島経由
しまなみ海道	平10年 (1998) 第一大橋960m 第二大橋1,515m 第三大橋1,570m	尾道～今治		3 島経由

写真番号 1 樹番号 1 ^{おおやまづみ}大山祇神社の大クス (^{おちのみこと}乎知命の御手植クス)

樹齢約2600年、樹周11m、樹高15.6m 愛媛県今治市大三島宮浦 国指定天然記念物

* ^{おおやまづみ}大山祇神社ホームページより

本殿正面にそびえるご神木は、大山祇大神の子孫^{おちのみこと}「小千命」によって植えられたもので、その時代は神武天皇御東征前と伝えられている。

<筆者のつぶやき>

写真を見ると、季節は5月の初め、初夏の陽ざしは柔らかくこの大クスに注いでいる。

陽ざしを受けた大クスは、大きく口を開け吠えているようだ。両手を前に突き出し、近づくものを跳ね飛ばすような形相である。この神社の守り神がこの木に乗り移ったような迫力を感じた。

御島大三島に祖神大山祇大神を祭った^{おちのみこと}乎知命の御手植のクスと伝えられているが、約2600年前といえば日の出国、天照大神が^{いずるくに}お隠れになっていた天の岩戸から^{あまてらすおおみかみ}お出ましになった神話の時代である。そう考えると、このクスノキには、天の岩戸をあけ天照大神をお助けしたとされる岩戸開きの神話の世界を思い起させる雰囲気がある。

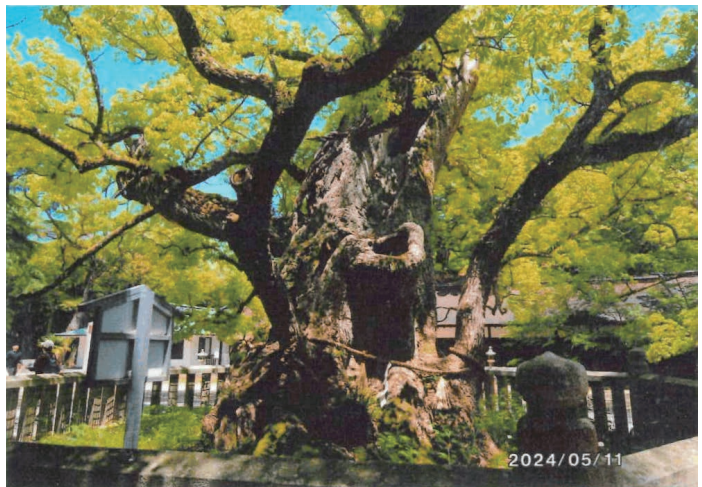


写真 1 大山祇神社の大クス

写真番号 2 樹番号 3 ^{たまづみ}玉澄さんの大クス (^{べつみょう}別名の大クス)

樹齢推定1000年、樹周10m、樹高22m 愛媛県今治市別名 国指定天然記念物、愛媛県指定天然記念物

* 愛媛県教育委員会の案内板より抜粋

^{たまづみ}玉澄さんという人は、約1300年の昔、小市国造 (旧越智郡地方の首長に当たる人) であった^{おちのみこと}乎致命の子孫越智玉澄のことで、^{べつみょう}別名に住み、戦乱を平定したり、別宮の大山祇神社を建てたりするなど、この地方の豪族であったといわれており、この幹の下に玉澄さんの墓があったといわれている。

クスノキは温帯地方に多い常緑広葉樹で、大三島や今治地方に大木が多く、今治市の市の木は「クスノキ」になっている。

＜筆者のつぶやき＞

ここで知ったことは、クスノキが温暖地に多いということ。だから、愛媛県に多いのか。このクスは、成長期は伸びが良すぎて幹が四方八方に気ままに分かれ「俺が、俺が」と勝手気ままに伸び、どこが主幹か見分けがつかぬほどである。人間も同じだ。分別が足りぬ頃の一家の兄弟たちも、まるでこのクスノキのように「俺が、俺が」のやりたい放題なのである。

人間は喧嘩別れすれば力は分散されてしまう。ところが木はそうはいかない。別れることが出来ないので、伸び放題でおかしな形になりながら、熟年期を過ぎ、老年期に入ると、今度は仲良くなって少しでも木全体を保たせようとしているのではないか。

このクスは、中央に大きなウロを持っている。木の余分なもの、幹の中心の熟しすぎた部分は放っておけば、腐り出してしまふ。このため、木は腐れを落とす。そこが空洞つまり「ウロ」となる。そして、余分なものをなくした表面の薄い部分、皮の部分で土から水と養分を吸い上げ、木の寿命を保っている。巨大な幹全体を支えているのである。これは生きるために必要な部分だけを残して生きるための策だと筆者は考える。

人間も余分な肉、脂肪などはそぎ落とし、骨格と筋肉だけで全体を支えている身体が望まれている。木と人間、同じではないか。

写真番号 3 樹番号 5 ^{みやうち}宮内地蔵堂のイブキ (ビャクシン)

樹齢推定1000年、それぞれ胸高幹周4.8m・3.5m・3.2m、樹高約21m 松山市指定天然記念物

＊松山市教育委員会案内板より抜粋

和名イブキ、ヒノキ科のビャクシン属で多くの基種、変種がある。福島県以南の海岸地や島に多く自生し園芸品種として公園、庭園に多く植栽されている。地藏堂境内にも3本のイブキの大木がある。1本は正面に残り、2本は本堂裏にある。

＜筆者のつぶやき＞

このイブキの木は、巨木というより珍木、変木の範疇に入る木ではないか、と評価した。ヒノキ科とは想像もつかないほどだ。すっきり直立、しかも捻じ曲がりの形が、3本とも全く同じ表情をしているのは、正に珍木の面目躍如たるもので見事ではないか。

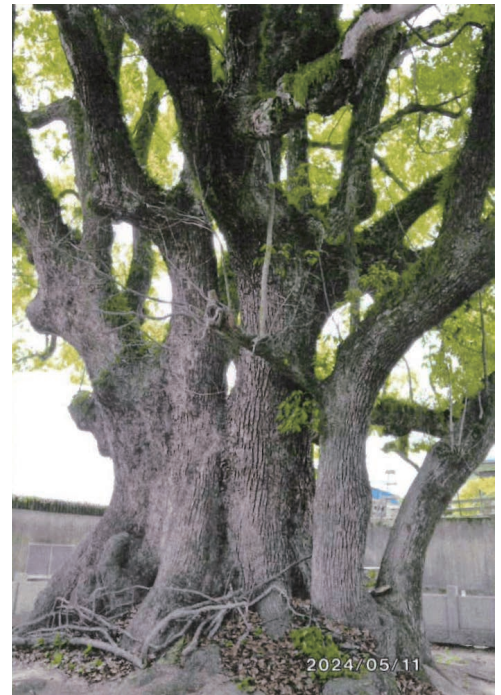


写真2 玉澄さんの大クス



写真3 宮内地蔵堂のイブキ

写真にある木を、遊び心で見ると、「雨風に曝され変形し、へばりつくカエル」に見えた。しかも、愛嬌のある表情で「今日は」と挨拶していると見えた。「楽しい」「楽しい」。木の観察は楽しくて、楽しくて、やめられない。読者の皆様いかがでございましょうか。

写真番号 4 樹番号14 ^{さかさつえ} 逆杖のイチョウ

樹齢推定700年 樹周12m 樹高30m 愛媛県北宇和郡松野町蔵生奥内薬師堂 愛媛県指定天然記念物

*愛媛県ホームページより

根周り12m、目通り11m、地上近くから5本の幹に分かれ、枝張り径20m、樹高は30mに達する。枝は見事に下垂し、主幹の根元には大きな瘤をもつ。雌株の多い県内のイチョウの大樹のなかで、このイチョウは雄株である。

<筆者のつぶやき>

このイチョウの木は一見してびっくり、直立した棒千本万本を集め束ねたと思われるような佇まいに圧倒された。自然の力はここまで及ぶのかと、驚きと同時に自然の摂理に深い畏怖の念を覚えたほどだ。

「逆さ杖」と名のつく巨樹は全国にある。本稿でも何度かご紹介している。

この「逆さ杖のイチョウ」のいわれを松野町ホームページより御紹介する。

むかし、むかし弘法大師が、奥内の遊(ゆ)鶴羽(ずりは)にきた。大師は、遊鶴羽のイチョウの木の枝を杖にして険しい山を降りた。そして奥内の薬師堂の庭の隅に杖をさしこみ、「この杖は生きている。芽が出てだんだん大きくなるだろう」と言って去って行った。

「弘法大師お手植えの逆さ杖」が、千本イチョウに成長し天然記念物に指定された。愛媛にはこのような由来のある木がいくつも存在する。神話かおとぎ話かもしれないが、地元にとって良いことではないか。

愛媛県、この先も興味深い巨樹・巨木に出会えるのではと推測し、ますます楽しみになって来た。
続く



写真 4 逆杖のイチョウ